

「めんどくさ。それに、外にクーラーはないし」

「ま。ぐうたら」

ぼくは、かあちゃんに背をむけ、クーラーのかかった部屋で、またゴロリと横になった。

ピコピコギョオーン、ギャンギャンギャン。

ピコピコギョオーン、ギャンギャンギャン。

ついに、かあちゃんがしびれを切らした。

「そうだ。隆、今、セミの声が聞こえたから、セミとりでもいってきなさい」

「セミは高いところにしかないから、ヤだ」

「じゃあ、ありんこ」

「ありは低いところにしかないから、ヤだ」

「うーん。じゃあ……、そうだ、カップ。カップをつかまえていってきなさい」

「カップ！ 今どき、カップ！」

「確か、裏のミドリガ池に住んでいたはず」

「マ、マジっすか」

「マジマジ。あなたは、童話作家のこどもでしょ。それくらい、できるでしょ」

「作家といっても、しろうとの童話賞に毎回おうぼしては落選してるのにな？」

「それをいうなー！ ガー！」

かあちゃんは口から火をふいた。

「しょうがないなあ」

ぼくは、しぶしぶ外にでていった。

十分後、ぼくは、えものを手に、かあちゃんのいるリビングにもどった。

「かあちゃん、どうだ。カップ、つかまえてきたぞ」

得意げにつきだしてやったら、かあちゃんは思わぬことをいった。

「あなた、どこをもつてんの。そんな風に首をにぎったら、息をつまらせちゃうでしょ」

「ええっ！ こういうものは、こどもだけに見えるというのがおやくそくなんじゃ……」

「わたしは童話作家。童話作家に見えないものはないのじゃ。ぬははは。まいったか」

カップは、つくえの上におろすと、しゃべりだした。

「おたくのクソガキ、なんとかしておくんはなれ。わし、もうすこしで死ぬところでしたわ」

「おお。カップって、関西人だったのか」

ぼくは、かあちゃんにたのみこんだ。

「ねえ、かあちゃん。このカップ、飼っていい？ そしたら一日じゅう話ができ、たのしいと思うんだけど」

うわめづかいに、かあちゃんの顔をうかがってやった。すると、カップが、ぶるぶる首を横にふった。

「あんさん、ちょっとは、わしの歳も考えておくんはなれ。」